

状況設定

場所 「

」 () 「 () 県

「自分」の境遇 「

」

心境の軌跡

★ 「 」について考える

① 蜂

毎日せわしく働いていた一匹の蜂の死。

←

死者の 「 」。。

② 鼠

小川で首に串を刺され、あがき回る鼠。

←

生きるものの 「 」。。

「 」を担いながら、

「 」様子が妙に頭に付いた。

自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った。

③ いもり

驚かすつもりで投げた石が当たって、死んでしまったいもり。

←

生と死を分かつ 「 」。。

自分は偶然に 「 」。いもりは偶然に 「 」。。

「 」と 「 」は両極ではなかった。

さして 「 」 ような気がした。

▼ 志賀直哉について

（一八八三（明治一六）年～一九七二（昭和四六）年）

宮城県石巻町いしのみに生まれる。二歳のころ、東京の祖父母宅へ転居。実業家の祖父の保護のもと、祖母に育てられる。学習院初等科に入学し、キリスト教思想家 「 」の影響を受ける。足尾銅山あしお鉦毒事件の見解について 「 」と衝突。以後、決定的な不和の原因となる。明治三九年、

「 」 大学英文学科に入学。 「 」科に転じた後、中退。明治四三年、同級生

の 「 」 「らとともに 「 」 「」を創刊。『』

『』など次々に発表した。父との不和が原因で、東京を離

れ、尾道おののみち・松江まつえ・京都・千葉県我孫子あびこと転々とした。大正六年、心境小説の領域を開拓した

『』、父との不和を解消していく過程を描いた私小説『』 「」を発表し、

文壇に確固とした地位を得る。『小僧の神様』を発表後、直哉自身の内面的な発展を主人公

「 」に託した長編小説『』 『』の連載を始め、完成まで十六年を費やした。

戦後は小説らしい小説を書くことはなかったが、短編小説の名手として 「 」と終生、 「 」と終生、慕われた。

